

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月10日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03235

研究課題名(和文) アジア海域における移動の人類学：「水際」空間における漁民の日常構築を通して

研究課題名(英文) Anthropology of migration in the Asian Waters through the construction of everyday life of the fishermen in the water's edge space

研究代表者

西村 一之(Nishimura, Kazuyuki)

日本女子大学・人間社会学部・准教授

研究者番号：70328889

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、高い経済成長を背景にグローバルな人的移動が展開するアジア海域を対象とする人類学的研究である。具体的には、漁業出稼ぎ者と台湾漁民および周辺住民を対象に、インタビューと参与観察による人類学的臨地調査を実施した。この時、漁港そして漁船を「水際空間」とおいて分析の対象とした。水際空間の中で繰り返される漁民の移動が、民族、宗教、経済、政治的に多様な境界を生み出し、その境界は政治経済状況や民族集団関係によって様態が変化することを民族誌的資料を基に明らかにした。この複数からなる台湾漁民社会は、グローバル化が進む現代社会で求められる、多様な価値観が錯綜する日常を表している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1990年代以降、台湾外から訪れる漁業出稼ぎ労働者は、すでに「例外」的な住民として地域社会で認知されており、彼らがない漁業地の姿はあり得ない。複数の民族集団からなる日常が展開する新しい社会のあり方を移動する主体に接近して考察した。水際空間には、漁業に従事する漁民とその周辺の人々が暮らす日常が展開する。本研究は、水際空間で展開する所与とされる枠組みや境界が、ある時は明示強調されある時は不明瞭にして柔軟になる様を、人々の生活実践の中から明らかとした。これは、異なる隣人との日常を生きる上で必要となる、新しい社会観の構築に発展する人類学的研究と位置づけられる。

研究成果の概要(英文)：This study is an anthropological research focusing on Asian waters where global migration develops in the background of high economic growth. Specifically, I conducted a research at the east coast Taiwan by interviews and participate observation for Taiwanese fishermen and residents (consisting by Chinese and indigenous people), and foreign fishing workers (coming from China and Indonesia). At this time, the fishing port and the fishing boat could be treated as "the water's edge space" and analyzed. It was clarified based on ethnographic data that the migration of foreign fishing worker in this space created various boundaries such as ethnic, religious, economic, political means, and the boundaries changed their forms depending on political and economic situations and ethnic group relationships. Taiwan's fishermen's society is made up of culturally diverse members, and represents the everyday world where mixed values is needed in today's increasingly globalized society.

研究分野：文化人類学

キーワード：漁民 移動 アジア 中国 インドネシア 水際

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初、台湾では既に台湾の外からやって来る労働者の存在感が、非常に高くなっていった。そして、かれらが台湾社会の新しい住民として認識されてもいた。この点について、従来4つの大きなエスニックグループからなるとされた台湾社会に、新たな5番目のグループが生まれたとする研究者の発言もあった。この新たなグループは「新住民」と呼ばれ、婚姻移民とその子女そして労働移民つまり外国人労働者が含まれる。

台湾漁民は、もはや台湾住民のみによって構成されてはいないのが現状である。漁業領域におけるマクロな政治経済を背景とした、頻りに繰り返される労働者の移動は、Chiuら[2014]が述べるように台湾からまた台湾への越境現象の一例と考えられる。調査研究を継続している台湾東海岸にある港町においても、1990年代よりかれらの姿が普通に認められるようになっていった。上記のような背景を持って展開される人的移動の中でも漁業領域に特徴的な点として、特殊な関係にあることを理由に行政上外国人労働者には含まれない中国から来る出稼ぎ者が、重要な働き手となってきた点を挙げる事が出来る。台湾(中華民国)と国家理念を相容れない中華人民共和国から来る彼らには、他の外国人労働者にはない制限が課されている。そして、2013年頃よりインドネシアからの出稼ぎ者が中国人にとって代わるように存在している。これは、中国の好調な経済を背景とした高騰する労働賃金に台湾漁民が応えられないこと、そして中国からの出稼ぎ漁民が高齢化しつつある点がある理由である。さらに彼らは、契約を重ね繰り返し調査地を訪れ、次第に欠くことの出来ない漁撈上のパートナーとなり、地域社会の様々な領域においてアクターとして存在し始めた。つまり台湾住民との間で相互に自/他の境界を絶えず更新しているのである。

2. 研究の目的

本研究は、高い経済成長を背景に盛んな人的移動が展開しているアジア海域を対象とする人類学的研究である。なかでも一早く、1990年代初めよりタイ・インドネシアを始めとする海外からの労働者を受け入れた台湾を主たる臨地調査の対象とする。また、中国と台湾の関係の変化は、互いの人的往来を盛んにしている。台湾の外からやって来るかれらを社会の中に受け入れるということは、新たに現れる文化的他者と生活を共にする日常を構築し展開する必要性を意味している。本研究では、台湾東海岸の漁港を中心とした陸域と漁船を含む沿岸海域を「水際空間」と置き、主に漁業領域における新しい住民である外国人労働者(中国人を含む)と地域住民との日常に目を向けその接触の様態を明らかにすることを通して、新しい社会つまり異なる隣人と暮らす社会のあり方について分析考察することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、台湾漁民社会について、漁業出稼ぎ者と彼らと漁撈をともにする台湾漁民、さらに周辺住民を対象に、インタビューと参与観察による人類学的臨地調査を実施した。臨地調査では、主要調査地を台湾東海岸の港町に定め、ここを往来する中国福建とインドネシアから来る漁民のグローバルな移動と漁撈活動における台湾漁民との関係について特に注目した。また、台湾での調査と合わせ、彼らの主要な送り出し地である中国福建沿岸部とインドネシア・ジャワ中部の沿岸部でも臨地調査を実施した。台湾東海岸に位置する港町を調査対象の中心に据え、連関する地域での臨地調査を通して、複数からなる台湾漁民のミクロな日常生活とこれを取り巻くマクロな政治経済の動向を接合させて捉えるとともに、複数のエスニック集団からなる調査地におけるエスニック集団間関係の理解に務めた。また、臨地調査による資料に加え、漁業調査報告、水産雑誌、行政文書や民族誌的資料などの文献収集を積極的に実施し、その分析を行った。

4. 研究成果

平成28年度においては、1990年代以降、台湾漁業領域において重要な役割を果たしてきた中国福建からの出稼ぎ漁業労働者について、台湾東海岸及び中国福建沿海部の漁業地で臨地調査を実施した。また、2013年頃より、台湾の調査地で中国人に代わり大きな存在感を示すインドネシアからの出稼ぎ漁業労働者と台湾漁民の漁業上の関係やその生活について臨地調査を行った。台湾東海岸においては、台湾漁民に対して、漁撈の場における出稼ぎ労働者の評価、雇用を巡る法的課題などについてインタビュー調査を行った。さらに、漁業出稼ぎ者には、個々の労働史、台湾での生活の実際について尋ねている。特にインドネシアからの労働者に対しては、彼らの生活と切り離すことが出来ないムスリムとしての信仰実践についてインタビューを行った。そして、調査地で働く中国人漁業出稼ぎ者の多くが、福建省閩南地域からやって来る。その送り出し地の一つである漁村を訪れインタビュー調査を行った。この漁村での漁業形態や地域史について、特に台湾海峡および東シナ海での漁業と台湾との往来に焦点を当て明らかにした。また、台湾漁民と共通する民俗文化(例えば閩南漁民社会における「鬼」に対する信仰)を視野に入れた調査を合わせて実施した。さらに台湾および中国福建沿海部の漁民の移動の背景として、戦前から今に至る中台関係の歴史研究や、中国福建沿岸部の人類学的研究に関する文献資料の収集を行った。

平成29年度においては、主な調査地としている台湾東海岸の港町で人類学的な臨地調査を引き続き実施した。台湾東海岸の調査では、漢民族船主船長と働くインドネシア人漁業出稼

ぎ者へのインタビューを行った。船主船長に対しては、近年の漁業の状況に加え、台湾外から来る漁業出稼ぎ者との漁撈活動について資料を得た。また、インドネシア人漁業出稼ぎ者に対しては、台湾で船に乗ることになった経緯、出身地の状況、台湾での漁撈について調査を行った。さらに増えるインドネシア人出稼ぎ者を主な客とする雑貨店でインタビュー調査を行い、漁業領域だけでなく、彼らが抱える生活上の問題や宗教活動に関しても資料を収集した。加えて中国人漁業出稼ぎ者について資料を収集した。彼らを雇う漁船の船主船長を訪ね、台湾と中国の関係を背景とする問題点、言葉を同じくする閩南系漢民族であることからくる漁撈上の利点について話を聞くと共に、こうした閩南系漢民族の船主船長の下で働く中国人漁業出稼ぎ者に対してもインタビュー調査を実施した。そして、東海岸沖合を漁場とし調査地の港に寄港し水揚げを行うマグロ漁船の基地である台湾南部の港町を訪れ、漁業出稼ぎ者の実態について補足的調査を行った。さらに大陸中国に近接した澎湖諸島にある閩南系漢人漁村を訪れ、中国福建との漁業上の関係について調べた。前年度実施した中国福建調査で、福建漁民が戦前から戦後直後、この島に寄港し周辺漁場を定期的に利用していたことが明らかになっている。いわゆる閩南民俗を共通する台湾と中国福建沿岸の人々の漁業領域の交流と交渉が明らかになった。さらに現在、この地にも多くのインドネシア人そして中国人の漁業出稼ぎ者が働いており、彼らの実態についても調査を行った。

平成 30 年度は、主な調査地としている台湾東海岸の港町およびインドネシア・ジャワ島とバリ島でそれぞれ調査を実施した。台湾での臨地調査では、ここで働く中国人およびインドネシア人漁業出稼ぎ者について、調査地としている港町の漢民族および先住民族アミで構成される住民の間で彼らの姿がどのように認識されているのかを調査した。閩南系を中心とする漢民族と先住民族アミが混住し、従前より両者が参入している調査地においては、漁業領域を始めとした様々な生活局面で双方の協働とある種の疎外が存在し、互いに自/他者イメージを構築している。そこに新たな他者として中国・東南アジアからの漁業出稼ぎ者が現れた現在、さらに複雑なイメージが構築されている。合わせて漢民族漁民にとって重要な年中行事である普渡において、特にインドネシア人漁業出稼ぎ者がいかに参画しているかを観察した。さらにこれまでの台湾調査で明らかとなったインドネシア人漁業出稼ぎ者の送り出し地となっているジャワ島東部(主にテガルとプカロンガン)そして台湾漁船がインドネシア船員を雇用してきたバリ島で臨地調査を実施した。1) ジャワ島では 2 つの漁業地を訪れ、台湾漁業出稼ぎの経験を持つインドネシア人に話を聞くことができた。また、両地の漁業状況を知ることができた。2) バリ島では、遠洋マグロ漁船基地とその周辺を訪れた。インドネシア調査では、台湾東海岸の調査地における台湾漁民とインドネシア漁業出稼ぎ者との関係において、常に言及される宗教の問題について特に理解を深めることができた。さらにインドネシアにおける華人の存在が、現在の台湾とのつながりの背景にあることを確認し、それが漁業上の関係にも関連することを知ることが出来た。

研究期間を通して、台湾、中国福建、インドネシアにある漁業地を訪れ、台湾東海岸の主要調査地との間で往来を続ける漁民の移動について調査を行った。つまり、グローバル化が展開するアジア海域の人類学的調査研究としてこれを行うことが出来た。本研究では、漁港そして漁船を「水際空間」として捉える。そこでは、漁業に従事する漁民とその周辺の人々が暮らす日常が展開する。中台の間にある特殊な関係も含めた国境を越えて台湾外から漁業労働者が絶え間なく移動し、それは国家や民族集団の枠組みや境界を顕在化し強化することもあれば、揺さぶりあるいは跨ぐこともある。例えば、相容れない国家観を持つ台湾と中国の関係を前に、中国人漁業出稼ぎ者が、他の出稼ぎ者と違って法的には労働者として扱われずまた陸上での活動に長く制限を与えられている状況がある。しかし、彼らの存在は台湾の領土に例外的な空間 [cf. オング 2013] を作りだしてもいた。さらに元々漢民族と先住民族から構成される調査地の漁民社会において、新たに現れたインドネシア人漁業出稼ぎ者を始めとする東南アジアの人々は、当地にある民族集団間関係の境界をさらに複雑なものとしている。漢民族から劣位に扱われてきた先住民族は、同じオーストロネシア語族にある東南アジアから来る出稼ぎ者たちをより近い存在として言及し、かつ漢民族との違いを明確なものとしている。さらには、漢民族船主船長の中には、中国そしてインドネシアからくる漁業出稼ぎ者たちを同船乗組の新たな仲間、つまり当地の同じ漁民としてみなすことを強調するものがある。この様に本研究は、水際空間で展開する所与とされる枠組みや境界が、ある時は明示強調されある時は不明瞭にそして柔軟になる様を、人々の生活実践のレベルから明らかとした。

これは、人の移動がグローバルかつ頻繁に発生する現代社会において、文化的に異なる隣人との日常が生きる上で必要となる中で求められる新しい社会観の構築に発展する人類学的研究と位置づけられる。繰り返される漁民の移動の中で、国際関係、民族集団関係、宗教などのレベルで数多くの種類の境界が生まれ、その境界の束が状況によって様態が変化する水際空間を如何により動的に理解していくのが今後の課題となる。この時、人類学者の植野 [2011] が台湾の境域を考察する手がかりとして出した定義と課題が有効である。また、台湾の社会学者王宏仁と人類学者郭佩宜 [王・郭 2009] が述べたトランスナショナリズムと台湾社会の関係が、極めて重要な指摘となる。

【参考文献】

Chiu Kuei-fen, Dafydd Fell and Lin Ping ed, 2014. *Migration to and from Taiwan*. London & New York:

Routledge.

オング、アイファ 2013 (2006) 『《アジア》、例外としての新自由主義 経済成長はいかに統治と人々に突然変異をもたらしたのか?』、作品社。

植野弘子 2011 「《特集》台湾をめぐる境域」『白山人類学』14:1-6。

王宏仁・郭佩宜 2009 「導論:跨国的台湾 台湾的跨国」王宏仁・郭佩宜主編『流転跨界:跨国的台湾 台湾的跨国』台北:中央研究院人文社会研究中心・亚太区域研究专题中心、pp1-32.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

西村一之 2018 「閩南系漢民族の漁民社会における「鬼」に関する予備的考察—「好兄弟」になる動物—」『日本女子大学紀要 人間社会学部』28:19-33.

〔学会発表〕(計 2件)

西村一之 2018 「台湾漁民と「大陸漁工」のつながりから見える「兩岸関係」」日本台湾学会第20回学術大会分科会「政治的変動下の生活世界にみる台中(中台)関係の諸相とその変遷」報告、横浜市立大学(神奈川県)

西村一之 2018 「台湾東海岸における船と漁民 移動と権力に注目して」シンポジウム「船で生きる人びと 漁労・水上居民・移民船」報告、鹿児島大学国際島嶼教育・文化センター(鹿児島県)

〔図書〕(計 0件)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。